20040

頚動脈ステント留置術（CAS)における放射線技師の役割

[1]一宮市立市民病院

長谷川　謙司[1]、長谷川　光太郎[1]、柴田　義久[1]

【背景】2008年4月よりCASが保険収載されることとなり、当院でも施行されている。【目的】CAS術前には様々な検査を行い、特に放射線部門ではCASを行うためにCT・MRI・RI・血管撮影を行っている。今回CAS術前から術中・術後まで放射線業務がどの様に携わっているのか検討する。【方法】当院でCASが施行された症例を例にとり、各検査の重要性を認識し、検討する。【結果】CASを施行するにあたりCTでは3DCTAによる狭窄部位・距離・内腔径の評価、MRIではBlack Blood法による不安定プラークの評価、RIでは脳血流SPECT、特にダイアモックス負荷血流SPECTにおける脳血流量・血管反応性の変化の評価など、血管撮影では3DAngioでの計測は勿論の事、CAS術中では血管内超音波による計測、術後では3DCTA・SPECTでの術後評価などが行われている。【考察】CASを行うにあたり、放射線技師において様々な部門知識また頚動脈狭窄症の基礎知識を十分理解し、各部門連携を密にすることで質の高い検査を行うことができ、業務の重要性を改めて認識させられた。